

響きあい Vol.5

平成30年10月
秋号

みんなの「生きる」を
社会福祉法人



老人福祉施設カリヨンの郷
施設長 早川直也

昨年度一月号でもふれましたが、人は便利さと引き換えに、失うものも多くあると改めて感じます。

最近では、年賀状を出す習慣も大幅に減り「昭和人間」からは、メールなどによる「新年の挨拶」って、不思議な感覚です。

例えば、手紙やはがきに書かれた「ことば」の背景にある**機微や息遣**いなどを、今の若い人たちにも感じてもらいたいものです。

◇ ◇ ◇

列車の旅をイメージします。走るスピードに合わせて、「線」から「面」への移動につれて風景が変わり、その景色の楽しみに加えて、列車内の人間観察も一興です。方言言葉であったり、風情であったり…；立ち振る舞いやその行動。

これからも、人の持つ五感、「視覚」「聴覚」「嗅覚」「触覚」「味覚」のすべてを使う感覚をずっと大切にしたい。行き先々々の食べ物や、それぞれの場所での人としての関わりや会話など…。

非常にゆつくりと流れる時間の贅沢さや経験は、これからの人生の中で「思い出以上の果実」になり

ます。

◇ ◇ ◇

最近の新聞に、このようなことが書かれていました。最近、フィルムを使ったアナログカメラが若者の間で見直されつつあるそうです。

「フィルム」は「モノ」としての存在感があると、その若者は語っていた。デジタルカメラとは違い、**モノの結果**を確認するには、時間と費用がかかるが、出上がり待ちの間もわくわくする楽しみです。似たものに、レコードやカセットテープがありました。私も四〇年前を思い返すと、少ないお小遣いの中で、音楽コレクションはすべてラジオからカセットへの録音が主で、その分「好きな曲へこだわり」も強く、同時にイントロが流れた時への思い入れも…。「モノ」は、時間の経過とともに、劣化し、傷ついたレコードではノイズが入ったり、大判のレコードジャケットは色あせたり…。改めて「昭和時代」は常に「モノ」を媒体に、貸し借りなどから情が発生し、自分の成長や社会の進歩を実感できる時代であったのかもかもしれません。

